

PHD LETTER

73

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1999・12

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 活動の成功の鍵は人にあり 3P
- 細一く、長一く役立ってくれたら 7P
- 10歳になりました ～ソディ通信27～ 8P
- 「子どもたちとPHDをつなぐ」プロジェクトが進行中 9P

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
 編集人：藤野 達也
 住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通 5-4-3
 元町アーバンライフ 202
 TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867
 e-mail : phd @ po.hyogo-iic.ne.jp
 定 価 : 100 円



カンボジア タケオ県パティ 撮影：FUJINO.T

お母さんに支えられて散髪。
 となりのおばちゃんのハサミさばきは
 リズミカル。
 カットの後は水浴びで仕上げ。

東西南北 問題解決 取組日記

8月×日

例年より半月早く、インドネシアのスマトラへ。次年度の研修生の選考も兼ねたスタディツアーだ。日本で研修中のダスウィルさんの村、西スマトラ州ソロ郡タベ村に2泊して、4人の中からアブダールさん(男・30才)を選ぶ。昨年は若い人を中心に10人を越える候補者がいたが、今年はダスウィルさんから選考についての村への助言もあって、候補者は昨年より絞られていた印象。これまでは村の農業による収入だけでは不足する分を町への出稼ぎで補うことが多かったが、農業の幅を広げ質を上げることによって生活を良くしていくことが目標だ。

丁度インドネシアは総選挙が終わったばかりの時期で、今年PHDが作った水牛のTシャツを研修生にお土産に渡したら、牛をシンボルマークに使うメガワティさん率いる闘争民主党のTシャツ?と言われる一コマも。

8月×日

お盆明けにスリランカに。アジア各地にみられることだが、農産物が国を越えて流通することがもはや当たり前になり、町から離れた農村といえども、国際経済のしくみの中にとりこまれている。研修生のいるクルネーガラ県ポヤワラー

ナ村の農業も例外ではない。自給用の米はともかくとして、それ以上の収入をとり組むものが、海外特にインドからの作物によって大きく影響を受け、厳しい状況におかれている。一時は野菜づくりで賞を取ったアジャンタさん(88年度男)、養鶏にとりくんでいたシャレントさん(92年度男)も今は一時村を出ている。ジャンタさん(86年度男)も、平日は会社に勤め、週末に農業。ナンダナさん(91年度男)とチャールズさん(87年度短期男)の二人が村をベースに農業をしている。課題を乗り越えるための方策も各人それぞれの考え方があった。

10月×日

次年度選考を第一目的に北タイ、東北タイへ。まず、メーホンソン県メーサリアンで、プリチャーさん(85年度男)、アンボンさん(97年度男)、プラチャクさん(98年度男)、サワンさん(同)そして今年研修中のボーディさん達と共にたらく人材として、シードンチャイ村を拠点とする手織り布グループのブンシーさん(女・19才)と面接。希望者は複数いたが、グループの方で絞りこんだ上の推薦とのことで、彼女を受けることにした。東北はカラシン県ナクーの3つの村からこれまでワラヤさん(88年度女)、サンコムさん(89年度男)、バムルンさん(89年度短期男)、サウェーさん(91年度男)、トンスクさん(91年度短期男)を迎えてきた。その内サンコムさんはバンコクにあるNGO、POPの職員としてスラムで活動し、バムルンさんは農民運

動のリーダーとして、広くタイ中を飛び回っている。残る3人が農民として村にいる。かつてここにはサイナワン農民協会という組織があったが、大企業による養豚の進出がもとで、大きなダメージを受け、解体に追いこまれてしまった。そこに昨年から新しい農民グループができた。それを支援し、この地域の農業が活性化することを願って、クッタカイ村からノパドンさん(男・23才)を選んだ。



グループのメンバーと話し合うノパドンさん(中央)

帰路、カンボジアにまわり、3人の研修生に会う。ソコムさん(93年度男)は役所勤めと併せ養鶏をやっていたがタイから安い肉、卵が入ってくるようになりエサ代と釣り合わずストップ。現在、次の策を思案中。ブノンベンから南へ一時間程のタケオ県パティのヴァナさん(93年度男)はコツコツと農業に取り組み、できるだけ農薬、化学肥料を使わないことを周りに勧めている。もう一人、カエウさん(95年度女)は、日本のNGO、JOCsの調整員に採用され村人への保健衛生教育にあたっている。久しぶりに出会った3人だったが、元気にやっていた。

総主事代行 藤野達也

▶ 私たちも応援団

～評議員を訪ねて～

PHD協会は理事会、事務局、会員およびボランティアのみなさんと評議員会によって運営されています。評議員会では、兵庫県下の様々な団体からお一人ずつ評議員を推薦いただき、それぞれのお立場から、PHDの活動に助言、指導をいただいています。その数は現在38団体です。このコラムではそうした評議員をお訪ねして、お話を伺っていきます。

——第一回はPHDが始まるきっかけとなった岩村昇医師への第一回ロータリー国際理解賞を授与していただき、それ以降もご支援をくださっている国際ロータリー第2680地区こゝろにおまむの米谷収ガバナーをお訪ねしました。

米谷ガバナーは当協会の会員でもあ

り、PHDの活動には強く関心を寄せていただいていること、1981年の岩村医師の受賞をきっかけにして多くのロータリアンがその趣旨に賛同し、協会の基礎づくりにロータリーの大きな働きがあったことなどを伺いました。

また、「ロータリーはお金を出すだけの団体ではなく、市民の目の高さで物を見、体を動かし、共に汗をかく、これがロータリーの倫理です」と話され、「してあげる」、「してもらう」の関係ではなく「共に」という考え方に、岩村医師の「おのおの物そして心の両面の10%をささげて」、「共に生きる社会をめざして」という言葉を重ねながらお話を伺いました。

これまでPHDがロータリーの各クラブから、どんな協力をいただいていたかを尋ねられたので、例会でお話の機会を

いただいたり、絵ハガキやPHDくつ下などの物品の購入や、研修生へのご支援、さらに個人として会員となっていたことをお話しました。

また、ご自身の銀行マンとしての経験から、仕事を組織内で効率的に進めていくには、しっかりとしたマニュアルの存在が重要だと指摘されました。

PHDも職員と多くのボランティアのみなさんのご支援、ご協力により事業を進めており、これを効率良く進めていくため、日頃からマニュアルづくりの必要性を痛感しているだけに、背筋が伸びる思いでした。

その他、PHDの研修生の選び方、日本の発展の基礎について、組織とリーダーシップの機能など、興味深いお話を伺うことができました。

『活動の成功の鍵は人にある』

地域の問題の解決には、資金や物資、技術があれば可能になるのではない。それにもまして重要なのはそれにあたる人である。さらにそれは一人では難しく、多くの人の参加が必要である。

そのことは、アジア・南太平洋の村の中だけに求められるのではなく、日本の地域の中で、またその課題に取り組むNGO/NPOにもあてはまる。そこで近年私たちが研修生を迎える一方で、日本の人に向けて、人づくり、組織づくりの学びを行ってきている。

9月下旬には、インド、カルカッタから社会開発コンサルタントのポール・シロモニ先生と精神衛生の専門家ジョイス・シロモニ先生を迎えてプログラムを組んだ。

—このプログラムは兵庫県国際交流協会、神戸国際協力交流センター、頌栄人間福祉専門学校、神戸YMCA、大阪YWCA、南山短期大学、関西国際大学の協力を得て行われました。

□神戸ではNGOで働く人、そういう分野を目指す人のためにONE DAY WORKSHOPを行いました。さてその中身は?

〈ことばの意味は、どこにあるか?〉

こんな一つの例を使いました。「友人から次のような手紙が来た。「弟が神戸に行くから迎えに行ってください。弟は背が高い男だ。」さて、あなたは、この背が高いという言葉で彼は何センチくらいだと思うか?」

参加者のイメージした身長は、様々。ここから、私達は言葉を使って人とやりとりをする時に知らず知らず頭の中で、それぞれの経験に基づいて言葉に意味を持たせていることが分かりました。でも、本人達は意識していないことが多いから、いつのまにかやりとりがチグハグになることがあると再認識しました。

〈TASK(課題)とPROCESS(過程)〉

一つのテーマについて話し合いをするグループを他の人達が観察しました。そして、途中で何度か区切って、観察している人達の気づいたことをグループにフィードバックしました。観るポイントは、議論の進め方や話し合いの進んでいく雰囲気、よく発言している人は誰かなど。

ここでの目的は、TASKとPROCESSについて考えること。議論をすすめていくことがPROCESS、与えられたテーマについ

て結論を出すことがTASK。ポール先生によると、世の中の全ての出来事には、TASKとPROCESSが表裏一体で在る、とのこと。物事を進めていく時に、このバランスを考えないでいると結果ばかり求めてしまっただけで過程がおろそかになったり、逆に、何も物事が進んでいかなかったりします。

〈MAO-B(動機分析)〉

組織内で働く人の行動の背後にある動機についてシートを使って自己分析を行いました。参加者は隠れた自分に気づくことができたのでしょうか?

さて、約30名ほどの参加者は、このワークショップをどのように受け止めたのでしょうか。以下は納屋知子さん(大学生)の感想です。

PHD協会、学校、会社など私達の日常生活の中には、実に様々な活動があります。その活動には、そのチーム全体の達成すべき目標や目的があります。メンバーは、第一にその全体目標を達成することを目的にして参加してはいますが、各々は「裏動機」ともいえるものを持って参加しています。例えば、「あの子と関わりたいなあ」とか「何かを達成してみたい」とかいうようにです。各々の人生の文脈の中でその時、その時の目標があるわけですが、同じ出来事も人によっては受け取り方も違うのです。だから逆に、どういう人なのか、何を望んでいるのかを知ることで、あるプロセスをどう感じているのか、これからどう進ませたいのかをより理解できるでしょう。

「活動の成功の鍵は人にある。」これは、同じ目的を持った活動も、誰が参加するかによってその方向性や可能性は変化する、という意味です。メンバーによって結果は

9月22日～10月2日

左右されます。でも、メンバーの肝心な「裏動機」をメンバー自身が自覚しているとは限りません。周囲の方が気づくこともあります。

「自己理解」と「相互理解」はよろずの基本なんだなあ。

□PHD協会の活動に戻って考えると…

私達がここで学んだことは、実際のいろいろな場面にあてはめることができます。

例えば、研修生が村で女性の自立を目的とした洋裁のグループを作るとします。そこに集まってくる人の動機は、様々。洋裁の技術を身につけたい人、人と話がしたい人、現金収入が欲しい人など。そこで、各々のメンバーが、いかに心を開き、また相手を受け入れていくことができるのか。その上で、共通の目的に向かって進んでいくことができるのか。

言葉で言うのは簡単ですが、実際にはかなり難しいことです。私達自身の生活を振り返った時、家族とでさえうまくやりとりができていないこともあります。みなさんは、どうでしょうか?

国際協力という少し自分のことと切り離して考えがちです。でも、実は私達自身が、自分自身をまた自分の働いている組織自体をみつめ、まずは自分から少しずつ変えていく、その必要性に気づかせられた、そんなワークショップであったと思います。



ビー玉を使った南山短期大学でのワークショップ

村を訪ねて、平和、健康、環境を考えた

研修生の住む中部農村のボヤワラーナ村での滞在、研修生との出会いに加えて、ユネスコの文化遺跡にも指定されたシーギリア、そして丁度年に一度のペラヘラ祭りの時期、古都キャンディを訪れ、豊かな文化にも触れることができました。また今回はボヤワラーナ村のまとめ役であり、短期生として日本も訪れたチャールスさんの勧めで北部のタミール・シンハラ抗争の被害を受けた村を訪問。いつもとは少し違った学びを得ることができました。参加者のレポートからその村の様子を報告します。

8月23日～30日 11人参加



最近まで戦いが続いており、本来なら、入ることのできない紛争地域。未だ緊張状態が続くその場所、破壊された村にアソク・マハディバル・ウェーラーさんの案内で行く。彼は、紛争で傷ついた子供達の心を中心にケアしていらっしやるそうだ。

村に近づくにつれて検問の量が増える。舗装道路から、乾燥した赤土の道へと入っていく。破壊のあと、屋根のない家々。放棄された田んぼが広がる。どんどん奥へと進んでいく。

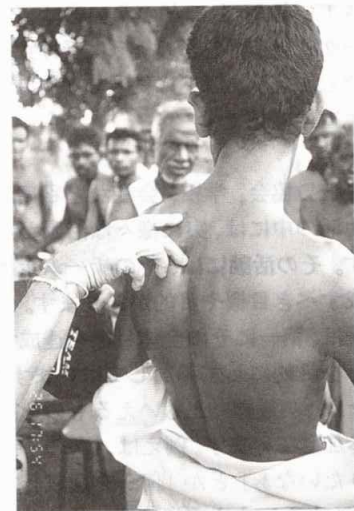
インディゴレーワ村。10人程の人が私たちを出迎えた。笑顔はない。元は、30家族が住んでいたが、今は、6家族しかこの村にはいない。老人たちは、いつ襲ってくるかもしれないゲリラを恐れ、難民キャンプから帰ってこないという。

以前、シンハラ人とタミール人は仲良く暮らしていた。しかし、一部のタミール人が、権力を求めて立ち上がった。そのふれ込みに他のタミール人も賛同。反政府武装組織、タミール・イーラム解放のトラ(LTTE)が誕生。両者の

関係は言うまでもなく劣悪なものとした。

ここでは、1994年に最初の攻撃があった。マシンガンやナイフを手にした兵士たち。中には女性もいる。その女性兵士が子供を地面に叩きつける、妊婦さんを殺す。同じ女性。分かり合える感情もあるはずなのに。この村では、大人12人、子供9人の命が犠牲となった。

私たちが話を聞いている間中、2人の男が銃を肩から下げていた。彼らは、今この村にいる20人ほどの



村の青年に就でうたれたあとを見せてもらった

人々を守っている。1人2時間交代だ。銃は警察から支給されているものと言っていた。彼らは、タミールを殺したこともあるという。この村のすぐ向こうは、LTTEの支配地域だ。

この村での今後の課題は、家の修復工事。11月に雨期が訪れるので、それまでに完成させなければならない。しかし、政府から資金がでないの、これもままならないという。2つあった井戸のうち、1つはつぶされてしまった。今ある井戸の水はとても汚い。病気になるかもしれない危険を冒しても、この水を使うほかないのである。政府からこの村には誰も来ないと言う。精神的苦痛ばかりではなく、生活に必要な物資も不足している。それでも彼らは、この村以外にも、たくさん大変な村があるんだ



12年ぶりの再会を喜ぶニラカンティさんとホストファミリーの野崎さん(当時は高校生だったそう)

から仕方ない、そう言った。子供たちは、依然として地面を見つめている。テレビで見るのとは違う、こういうことが現実に起こっている。アソクさんはこう言う。「今、この地は、50年前の日本と同じです。当時の日本のことがよく分かります」と。戦争を知らずに生まれ育った私たちには、本当の意味で、この感情を共有することはできない。やるせない気持ちが湧いてくる。戦争という悲劇を繰り返さないためにも、決して54年前の出来事を風化させてはならない。そして今、目の前で起こっている事実を伝えなければならない。切に思った。

帰り際、村の代表の方が、危険を冒して、ここまで来てくれて感謝する、と言ってくれた。私には何もできないのに…身の縮まる思いがした。

大野 千鈴(高松市 大学生)

私たちは、学校で戦争はつらくて悲しいもの、そして、二度とやってはいけない事と教えられるけど、私たちはどんなものか知りません。

このツアーで難民キャンプから帰ってこられた人たちの村を訪問することによって、その人たちの話を聞き、私たちは戦争と紛争がどんなものか、そして、知らなければいけない現実を覚えてもらいました。

今でも紛争をしている国が早く無くなることと、平和な世界が続くように誰に対しても優しさや思いやりを持たなければいけないと思いました。

酒井 実結(篠山市 高校生)

スリランカ スタディツアー報告
インドネシア

今年のインドネシアツアーの参加者は、学校の先生や中学生を含む13人。それぞれの視点で、立場で感じたインドネシア。みなさんのレポートから抜粋でお届けします。

8月5日～14日

タベ村では、村の健康を預かる助産婦のイエさんの家にも泊めてもらいました。

翌日、さっそくイエさんにこの村の状況や、健康問題について話を聞いた。今、村で問題となっているのは小児の健康問題で、ビタミン不足による発育不良、栄養失調で、どのような対策をとったら良いか質問された。見回してみると村の子供たちや、青年期にある人達は小柄でやせている人が多い。飽食日本との違いや栄養問題で、やはり基本となるのが食事で、野菜、蛋白質、カルシウムを含む食品の摂取が大切であることを説明した。しかし、この村で取れる作物は限られており、十分栄養を得るものはすくないこと、牛乳を飲む習慣がないこと(味が薄くてまずいので)、などの問題点があげられた。

また、出産後の母子の死亡が多いこと、成人女性の生理痛の激しいことや、不規則であることなども話してくれた。村にあるのはわずかなビタミン剤で解熱剤や鎮痛剤がなく、良い薬があれば服用させたいが、いまだ専ら祈祷師による治療が行われており、村人も薬を飲むことに恐怖心を抱いているとのことである。

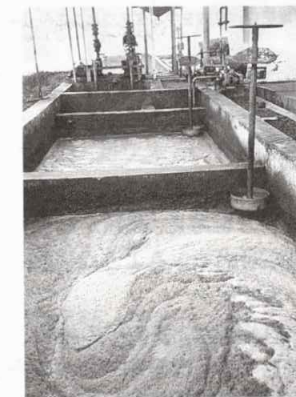


啓発ポスターとイエさん

イエさんの診療所に案内されると、そこにはベッドの横に薬を入れる棚、

血圧計、カルテらしき診療録がきちんと整理されて並べられていた。壁にはエイズ予防の啓発や学童の保健衛生を守るため、ぎょう虫駆除や手洗いを励行する内容のポスターが貼られていた。ちょうどその時、腹部の大きくふくれた乳児を抱いた父親がイエさんのもとを訪れた。その乳児は苦痛のためか泣き叫んでいた。固く、大きくふくれた腹部を前にして私は聴診器を当てたが何も聞こえず、どうしたらよいか途方に暮れてしまった。イエさんは戸棚からびんに入った薬を手渡し、一言二言、父親に何かを告げていた。

栗坂 清美
(加古川市 看護学校教員)



パーム油工場の廃液

今回、パシルバルーでパーム油のプラントーションを見学しました。

パーム油工場の廃液は、どう見ても体に悪そうな廃液です。工場の方はバクテリアで分解してから廃棄するので安全だと言っておられました。また、インドネシアにも排出規制があり、それも満たしているとのことでした。しかし、マレーシアのサンダカンというところでは搾油工場からのヘドロにより1つの漁港が無人の里と化してしまったそうです。また、家庭においてもごみの回収が行われていないので野焼きや海洋投棄が行われています。特にパシルバルーでは海岸にごみが散乱しており、西洋文化の流入に意識やシステムがついていけてないという感じでした。

ヤニさん(92年度女)に日本の良



いところを聞いたところ、物質的豊かさという答えが返ってきました。しかし、物が溢れていることは同時に廃棄物も溢れていることであり、その量はインドネシアの比にならないでしょう。実際に日本では行政が許可した最終処分場から有害物質が流れ出し被害の出ている例があるのです。このような現状を知り、一人一人が出来ることから始めていくことが解決する道だと思います。そうすれば同じ道を辿ろうとしている途上国の見本となれるかもしれません。

大谷 佳寿紀(高松市 大学生)

帰国した研修生、これから来る研修生・・・

ヤニさんから、日本で研修して村へ帰ってからの様子を聞きました。なかなか思うようにはいかないようでした。日本で学んだようにすると、村の人達の生活習慣をかえるようなことになるそうです。でも、ヤニさんは村の人達の栄養のこと、衛生のことなどを考えてみんなに分かってもらおうと努力していると聞きました。日本から帰った研修生ばかりが集まって、村の生活習慣をがらりと変えてしまうよりは、少しずついいから、村の人達に分かってもらいながら、問題を一つ一つ解決していく方がいいと思いました。

松本 碧(神戸市 高校生)

「継続は力である」。PHDの働きを体験できて、時間をかけた交流の深さと、積み重ねを思った。村人達とじっくりと話し合いをしながら、研修生を選ぶ作業にも参加した。一つの村で、核になって働ける人を選ぶ。広く浅くではなく、継続して深く交わることも大切なのだと改めて教えられた。

矢萩 雅一郎(神戸市 高校教員)

17期生

エディーさん

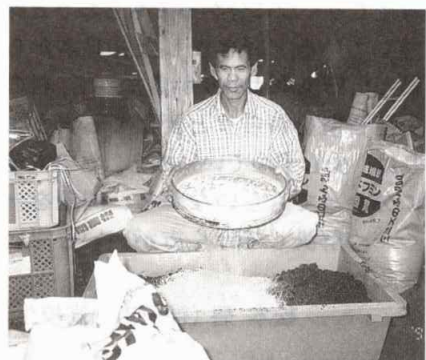
フィリピン

笹間政典氏(鳥取県日野町)~吉田吉彦氏(兵庫県永上町)~かこしま有機生産組合、前園寛氏、今村君雄氏/石垣信也氏(鹿児島県鹿児島市、指宿市、始良町、高尾野町)~大森昌也氏(兵庫県和田山町)

エディーさんは、農業の技術のみではなく、有機農業の考え方や、かかわる人からも学んでいます。9月に出かけた吉田さんから、「有機農産物と言っても本当かどうかはわからない、だから、私は消費者と付き合い、農業をしている。そして、消費者も、私が作ったものだから買ってくれる」と聞きました。

エディーさんは、どこの国にも儲けることばかり考える人は多い。でも私は、信じることを正直にやりたい。日本で出会った多くの農家と消費者の人のように一緒にやれる人がフィリピンにも必ずいると思うと話しています。

10月には、鹿児島へ出かけました。今回初めてお世話になった前園さんは、できるだけ自分の土地にあるものを利用しておられます。その姿勢から、エディーさんは、日本で見たことをそのまま実践しようとする、機械や資材を買うことができないため難しいことが多くありますが、工夫次第で、たいいていのは何でもできると勇気づけられたようです。



苗土の作り方を学ぶエディーさん(指宿市)

ダスウィルさん

インドネシア

小前芳彦氏(兵庫県篠山市)~田中五郎氏、加納卓也氏、後藤堅吾氏(波賀町)~真柴三幸氏(南光町)~金谷昌高氏、上垣春雄氏、上垣敏明氏(大屋町)~但馬農業高等学校、谷口雄造氏、西沢泰裕氏(八鹿町、浜坂町、豊岡市)~松本直樹氏(神戸市)

出身地域のタベ村では、農業は自給が

研 修 生 し ぽ ー ト

中心です。教育、日用品の購入など現金が必要な場合はサトウキビ、籐細工を売る、出稼ぎなどでまかなっています。そのため、農業だけにダスウィルさんの研修の焦点を絞るのは現時点では難しいようです。しかし、今アジアの村は急速に変化しています。タベにも電気が通り、



堆肥の作り方を学ぶダスウィルさん(南光町)

町からの道がついています。情報、物が入ってくると、色々な問題を抱えるようになるでしょう。日本では、様々な農業の方法と日本の現状をみて、今後の村の農業と在り方を考え、問題が起きた時に一刻も早く対応できるような研修をしたと思います。

今後の研修では、彼の村の地場産業である竹細工(村では籐細工)の研修も取り入れます。

ポーディさん

タイ

下吉富久子氏(兵庫県篠山市)~はらっぱ保育所/前田公美氏(西宮市)~高橋武子氏/田之上あきえ氏(三木市)~田中直染料店(京都市)~国際交流の会とよなか、番西一恵氏、清水せつ子氏、越水ユリ氏、高丸恵子氏、鬼丸久代氏、伊藤名知子氏、堀井秀子氏、葛西美紗氏、野村和子氏(豊中市)~鴻谷美江子氏(神戸市)~三朝町企画課、町民課/能見貞明氏、青木大雄氏、安藤麗氏(鳥取県三朝町)~小阪昭南氏(神戸市)

9月には、西宮市にあるはらっぱ保育所での研修に出かけました。はらっぱでは、季節の野菜を農家から直接買って昼食を作っています。同じ野菜も子供たちが飽きないように毎日目先を変えて調理し、楽しい雰囲気の中で、野菜嫌いの子供にもたくさん食べてもらおうと毎日工夫しておられる姿勢は、ポーディさんにも参考になりました。

また、手芸では、新しいことに取り組

むこと、一つの課題に丁寧に取り組むこと、また以前習った課題の復習の3つをどれも手を抜かず、コツコツと努力しています。3月までの上達ぶりが楽しみです。

ベリポーさん

タイ

篠山市保健センター、篠山デイサービスセンター、ささやま保育園/谷田治氏、岩下富子氏(兵庫県篠山市)~三木市総合保健福祉センター、兵庫県三木保健所、高橋武子氏/森田正氏、芝美代子氏、三木市国際交流協会(三木市)~田中直染料店(京都市)~永江きよみ氏、坂田恵子氏、三上千恵子氏、藤澤あけみ氏、ステップハウス/榎野泰弘氏、神吉道子氏(高砂市)~三崎三千代氏、松本百合子氏/臼井澄雄氏、吉岡浩氏(春日町)



カレンの布で作った服を着て(三木市、左:ベリポーさん、右:ポーディさん)

現場研修開始から3ヵ月たちました。PHDの研修では、農業、保健どの分野でも同じですが、学ばなければならないこと、帰国後の課題が具体的に提示される訳ではありません。日本で学ぶ様々な事柄の中から、共通して大切なことを理解し、そこから、村で自分たちでやることを考えることが必要です。自分の立場と村の状況を考えながら、具体的にできそうなことを見つけるまでが悩む所です。ベリポーさんの村は、保健衛生の環境が徐々に整いつつあるため、専門家でない村の普通の人ができることが見えにくくなっています。けれども、離乳食の改善や今後増えるであろう生活習慣病の対策など、できることはまだまだあります。ベリポーさんが、そういうことを具体的に考えるのは、もう少し先になりそうですが、送り出し団体からの励ましも受け、頑張ることを期待しています。

細一く、長一く役立ってくれたら

PHDでは女性研修生の希望に応じて洋裁、編み物などの研修を行っています。

保健衛生のことを伝えるには、話だけでは難しいので、帰国後、村の女性の関心を引き、家族の服を自分で作れば支出が減り、浮いたお金で食事の充実を計ることを期待しています。今年の研修生は、地域の女性が織った布をカバン等に加工し、販売できるように手芸を研修しています。2人の先生と考えました。

PHD(以下P)今までの研修とは少し研修の目的(家族のためではなく、売るため)が違いますが気付かれたことは?

鴻谷(以下K)売るなら自己満足を越えた厳しさが必要です。初心者だから、それを教えたほうが良いと思うんです。キズ、汚れではなく縫い方のレベルがいつも一定でない。将来的に、自立して欲しいなら必要なことです。そうでないとPHDの手を離れたときに苦勞するのは、村の人です。

高橋(以下T)そうですね。去年までは、自分の技術をそのまま教えると進まないし、必要ないと思ってきました。例えばサビトリさん(ネパール・97年度)に好きなようにと言ったら、前後が同じ形のズボンを作ったんです。前後どちらにもはけるからいたみにくいと言います。研修生の必要に合わせていくことを大切にしてきました。

だから、ポーディさんがちょっと縫い目が曲がっていたらやり直すと言った時、今までの研修生とは考え方を変えないと、と思いました。基礎ができていいる“手抜き”と最初から抜くのは手の抜き方が違います。例えば、この布は(カレンの)スカートを作るための布です。それを加工するなら、加工に都合のいい幅に織った方がいいんです。織るのはプロなんですから。それが基礎ができていいる“手抜き”だと思います。

K 今は研修生には、そういう発想はないようですね。今あるものを加工してと

いう発想でしょう。今後、提案していきたいですね。

この布の販売についても、支援として売ることを続けるのかどうか。売り手(カレンの人)と買い手(日本人)の感性が違うのに支援で売るのは大きなエネルギーがいりますよ。それを踏まえて付き合い方を決めてから、私たち指導者に相談して下さい。売るには自信も必要ですよ。



左:高橋武子さん(三木市)研修生の指導は3年目。注文を受けて洋服を仕立てる仕事をなさっています。右:鴻谷美江子さん(神戸市)昨年、ゲオリさん(98年度)が農業研修先で知り合ったことから指導者に。普段はパッチワークの先生です。

T 勉強してきたという事実と、経験ですね。

K 厳しさと自信を身に付けて、それを人に伝えるのは大変です。皆が理解できるように1教えるには10理解していないといけなし、楽しくないといけなし。教える極意は「自分に厳しく他人に優しく」ですね。

T 教えるのは保健よりやりやすいと思うんです。してみせられる手仕事の強みです。

K 手から伝わりますからね。でも、どうしたら教えた技術が役に立つのかを考えると難しくなってきましたね。

T 私はもう少しふわっと考えています。細一く、長一く役立ってくれたらいいです。ポーディさん、ベリポーさんは、今、自分の中にたくさん引き出しを作っ

国内研修生

のうどう 納堂邦弘さん (男・25才)



2年間の英国留学を9月に終え、10月から来年3月まで研修中。悲劇的に衰えきった漢字力に戸惑いつつも、この研修を通じてNGOの運営を幅広く学びたい、と考えています。啓発・広報活動に関心があり、次号では、皆さんの会報に対するご意見・ご感想をアンケート形式でお聞きできたら、と現在企画。より良い会報を目指し、ご協力をお願い致します。米国生まれの大阪育ち、今の住まいは枚方市。趣味はカヌー。

ています。今は、整理できていないと思うけれど、それでも引き出しがたくさんたまると、整理して必要に合わせて開けることができるようになるでしょう。

これからの研修では、心構えは立派だと思ふので、それが空回りしないようにしてあげたいですね。ポーディさんの意欲がこれをやりたいという風に具体的にになるといいですね。

K 私は、欲求にしたがっていろいろやるのはまだ早いと思っているので、段階を踏んで教えます。色々やるのは他の先生にお願いして、私は基本をやりたいと思います。

T 研修生も色々な先生のいいとこどりができるといいでしょうね。

K 私は、研修生を訪ねてタイへ行ってみたいです。高橋さんも行きましょう。

T 私は日本しか知らないんです。でも、研修生と付き合い、こういう国もあるんだって視野が広がります。それが一番の収穫かな。でも、鴻谷さんみたいなパワフルな人がいると引っぱられて行くかもしれませんね。

たくさんの課題が指導者のお二人から、提案されました。研修生の村でも、基本的な必要が満たされるようになり、プラスアルファの現金が必要になってきています。村の状況の変化、今後の付き合い方を考慮し研修を考える必要を感じています。

10歳になりました。【タイの布を支援するグループ ソディ】



PHDの中で産声をあげたボランティアのグループソディが、この1月で10歳という年輪を重ねてきました。PHDの主たる活動である研修事業—研修生を日本に迎える、彼らが1年間家庭滞在をしながら日本のひとびとの中にあって学び、教える「草の根の交流」をおこなうなかで、派生してでてきた新しい切り口の活動が、この「布を通しての交流」です。

山岳地域に多く生活しているというカレンという民族である彼女たちの初めの願いは—自分たちの日常生活のなかで織る布を、『値段』をつけてお金を出して買ってくれる

人がいると私たちの家計が助かる—というものだったかもしれません。布を通して、時間をかけて交流するなかで、初めてわかったこと、やってみて初めて見えてきたものがあります。いろいろなことをソディは、経験、体験してきました。その10年を大きな動きで振り返ってみました。

今まで布を買ってくださった方、布に触れてくださった方、村を訪ねた方はもちろん、ぜひ、応援、励まし、ソディや布に対するご意見など、お寄せください。次号でご紹介したいと思います。

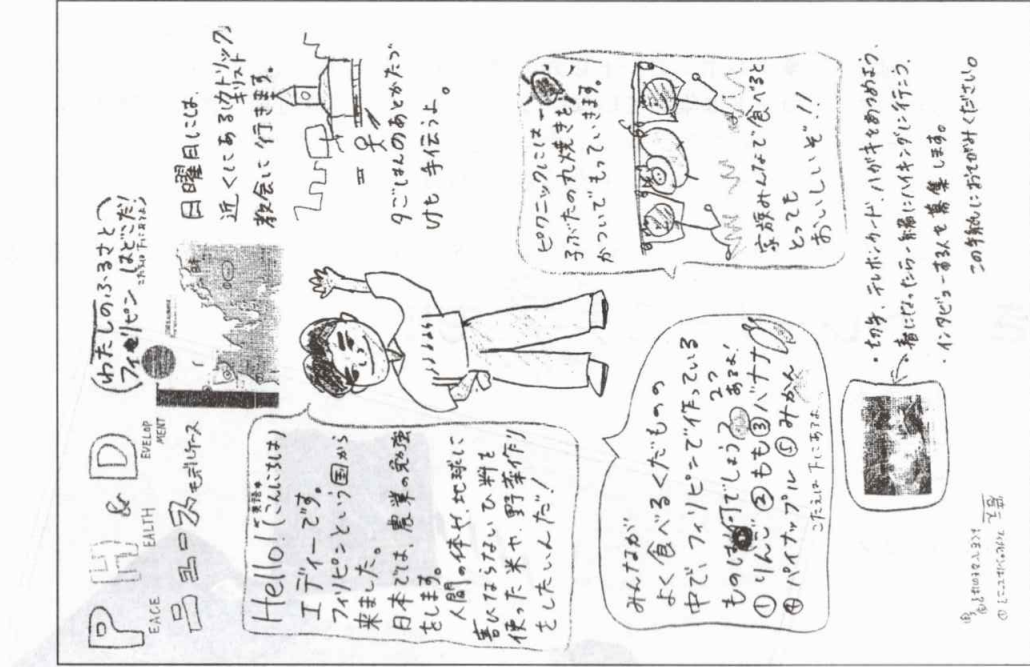
年月日	村・研修生の動き	国内の動き
1989. 7	ムシキーがんばる布のグループ発足 職員出張時に相談あり	<p>タイ・カレンの人の住む地域</p>
1989. 12	ツアーで初めて布を大量に持ち帰り 以降ツアー時、グループとの交流と布持ち帰り	
1990. 1	グループソディが発足 春 そごう(神戸)、丸栄(名古屋)の「タイ・フェア」に出店	
1991. 3	ブリチャー妻のチャンタナさん出産のためメーサリアンへ里帰り、布のツアーも 以降2つの地域とやりとり	ソディ月一回の定例会を始める 布中心のバザーやイベントについて 村とのやりとりについてなど 戸隠へ草木染め体験ツアー(94年も)
1991. 9	ムシキー布グループから織り手を招聘 PHD 10周年記念事業のひとつとして各地を回る	ブリチャーさん来日にあわせて ソディの交流会 布の宣伝、村のグループの活動報告
1992. 12		きれ綺麗市(吹田市、97年まで) 手工芸品の展示即売の会
1993. 夏		
1994. 5	ブリチャーさん再来日 農業の産消提携・流通を中心に学ぶ	
1994. 夏	 ブリチャーさんとツアー参加者に関する(メーサリアン)	
1996. 5	ブリチャーさんムシキーの学校を退職 メラノイ(メーサリアングループのある地域)に住まいを移す	「布の旅」Part1 (池田市) 山岳民族のカレン、ラフについての文化や布を紹介し交流会を催した
1996. 12	ツアーのコースにメーサリアンも これ以降年末ツアーで訪ねる	「布の旅」Part2 (池田市) 村の織り手による織りの実演を行った
1998. 5		
1999. 4	ポーディさん来日、研修(2000. 3まで)	2つの布のグループのメンバーが顔合わせ 研修生と一緒に研修をすることができた
1999. 6	ベリポーさん来日、研修()	
2000. 1		ソディ10周年 オメデトウ!!

「子どもたちとPHDをつなぐ」プロジェクトが進行中!

***子どもたちに響く「きっかけ」を**
PHDの職員が学校にお話に行く。子どもたちが参加する。など。そんな機会に、自分たちの生活と世界とのつながり、人と人の交流と協力が生み出す「静かな力」を、子どもたちにも感じてもらえる「きっかけ」を届けたい。「子ども向けレター(会報では、難しすぎる年齢の人たちへのもの)を作りた。一緒に始めませんか」という事務局の呼びかけにはそんな思いがこめられていた。

***ポディプロー、ふたたび(前号を参照)**
手はじめに、自由な発想でいろいろアイデアを出してみようということになった。「子ども向け壁新聞作り」を企画し、声をかけたら、春のワークショップで出会ったメンバーがたくさん集まった。早速2班にわかれ、PHDの活動に関する資料を参考に、自由に壁新聞を仕上げた。そのうちの一枚がこれ(縮小版)。
・子どもが興味をもてる話題を選ぶ
・自分が実際に「国際協力」のために実践していることを紹介する
・研修生の出身地域の生活を通してPHDの活動や生活習慣の違いを紹介する
・地図や写真、イラストを活用するなど、それぞれの工夫を出し合った。

***みんなで作れば文殊の知恵**
1回目の壁新聞を元にレター(チラシ)を作ろうと集まった2回目は、中学生や高校の先生、教員志望の学生などさらに多様なメンバーが増えて、新しい視点からの意見も聞くことができた。



・子どもたちといっても幅広いので対象をしぼり、どこで、どのように使うものか、はつきりさせたい方がよい
(対象は、小学校高学年から中学生と決めた)
・これでは表面的で、面白くない
もっと内容について詳しく知りたい
(これは中学生のなかなかすすむ意見)
・「チラシ」は大人の発想。チラシという手段にこだわらず、物語や遊び、紙芝居など、子どもとつきやすいメディアを探したらどうか
とどんどん広がっていく構想。これから、どうなるのか!?

***「プロジェクト」への発展**
この2回の集まりを踏まえて、もっと丁寧に、この「子どもたちとPHDをつなぐ」という大きなテーマをあためていくことになった。当面の目標は、A4サイズの1枚を仕上げること。そこからまた発展させていこうと計画している。
私は小学校で非常勤講師をしている。子どもたちと過ごすなかで、日々感じていることは、子どもたちは本物との出会い、人と人とのあたたかいつながりを求めているということ。まだ見ぬ子どもたちのために、大人も子どもも本気になって、それぞれの持ち味をだしあい、1つのものを作り上げる過程は、私自身をとって元気にしてくれる。
子どもの好きな人、子どもを育てている人、教育に関わる勉強や仕事をしている人、していない人も、みんな一緒にあーだの、こーだの知恵をしぼってみたい。せんか。きつと、子どもたちに響くすきなものがないはず。

9月27日作成
この壁新聞に関して、またこのプロジェクト全般に関して新しいアイデア、提案、改善点などありましたら、ぜひ事務局へお寄せください。待っています!!
・次号では、完成した子ども向けレターを紹介する予定です。お楽しみに!

10月25日

尾下 葉子(加古川市)

使用済みプリペイドカードの行き先

PHD協会が会員や協力者の皆さんからいただくご協力のひとつに、使用済みテレホンカードなどの収集があります。最近、よくお問合わせをいただきますので、今回は、使用済みカードについてご説明します。

◆以前はNTTが回収していたけど、NTTがやめたあとはどうなっているの？

以前、PHD協会では集まったカードを、ボランティアの方々に整理していただき、枚数を計算した後、NTTに引き渡していました。しかし、1998年2月にNTTはカードの回収を終了しました。それ以降は、切手やコインなどを扱う業者に送り、カードの種類に応じて一枚あたり1円から数円で引き換えていただいています。その収入はPHDの研修生の1年を支え

る一部となっています。そうしたご協力は1998年度だけで256,079円もの金額となっています。

◆集まったカードはどこへ行くの？

デパートの催し物会場のコイン・切手販売コーナーに業者の方を訪ねました。そのお話によると、集められたカードは最終的に、国内外のカード収集家の手に渡るようです。

海外ではお城の写真や特定企業の記念カードなどに人気が集まる傾向があり、国内の方がそうした人気の偏りが少ないので市場としては大きいようです。

◆テレホンカード以外のプリペイドカードは集めていないの？

会場ではテレホンカード以外のプリペイドカードもたくさん売られて

いました。これまでPHDではテレホンカード中心に収集を呼びかけ、オレンジカードやハイウェイカードなど他のプリペイドカードもそれとあわせて引き取っていただけてきました。しかし、今回のお話では、携帯電話の普及などもあり、テレホンカードの市場が行き詰まりを見せているそうです。そこでPHDでは、テレホンカード以外のプリペイドカードも収集を呼びかけています。もちろん、書き損じハガキやロータスクーポン、グリーンスタンプなども引き続き集めていますので、ご協力よろしくお願ひします。

皆さんの地域、職場、学校などでも周りの方に呼びかけてみてください、「身近にできる国際協力にはこんな方法もありますよ」と。

LIVING IS SHARING LIVING IS SHARING LIVING IS SHARING LIVING IS SHARING LIVING IS SHARING LIVING IS SHARING LIVING IS SHARING

大好評につき、トレーナーにも!!

今年の夏、Tシャツに新登場した水牛柄。会員さんがデザインしたこの柄、なかなか好評につき、トレーナーにも登場です!!

少し会員さんからの声を紹介すると...

あの小鳥が効果的です!
井上弘子さん (福岡県)
□そうです、実はあの小鳥が、このTシャツのミソです。

僕は、去年1年間インドにいましたが、以前買った唐辛子のTシャツがどこに行っても大人気でした。「チリ!!チリ!!」と僕を見るなり、大人から子どもまで大騒ぎ。いいですねえ、あれ。

村瀬義史さん (愛知県)
□ぜひ、他のみなさんもこれに続いて人気者になってください!

1500円の品物なのでたいしたことないだろうと思っていたのが、生地が大変丈夫でびっくりいたしました。注文してよかったですと嬉しかったです。

神山由里さん (和歌山県)
□トレーナーももちろん丈夫です!!



価格: 3,000円
サイズ: M、L (少し大きめ)
カラー: 唐辛子柄 (96-1)
グレー地 / 紺地
水牛柄 (99-2)
グレー地 / 紺地 /
濃緑地 / 渋めの赤地

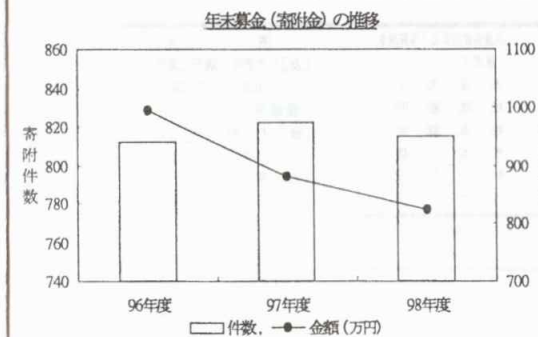
*色揃えに限りがあります。
お早めにご注文下さい。
*Tシャツもよろしく!!

また、PHDの物品が一目でわかるチラシも作りしました。「いつも、バザーをして下さって言うけど、一体どんなものがあるの?」と思っておられる方、ぜひご連絡下さい。すぐに、お送りします。

～年末募金のお願い～

不況の底は見えたとはいわれていますが、生活実感としては、まだまだ厳しいのではないのでしょうか。そのことはPHD協会をはじめとして、皆様のご支援によって支えられている、NGOにとっても大きな問題です。

それを考えるにあたり、PHDへ寄せられた年末募金の推移を振り返ってみました。



上の表は、過去三年度に、会報12月号をお手元にお届けしてから2月末までにいただいた寄附金の件数と金額のデータです(但し100万円以上の大口寄附は除く)。

いただいた寄附の件数は三年間でほとんど変化がありません。これは

会員・協力者の皆様が、厳しい経済状況にも関わらず、分かちあいの心を持ってPHDをお支えくださっていることの表れです。皆様のお志に心よりお礼を申し上げます。

今年度もここまでの収支の状態は苦戦中ですが、皆様の継続したご支援により、会費・寄附ともに、件数は前年と変わらないペースです。以上のことから、安定してPHDを支えてくださる「層」が形成されているといえるでしょう。

しかし、寄附金額の低下が示すように、経済的に厳しい状況下で一人一人からのご協力では限りがあり、これまでの皆様のお力のみでは、苦しいのが現実です。そうすると、この状況下で活動を続けていくためには、これまでお支えいただいていた皆様にご支援の継続をお願いするとともに、新しくPHDをお支えくださる方を、これまで以上に増やさねばなりません。

それは、新しい方々から活動の「評価」を受けることでもあります。こんな社会状況だからこそ、NGOはそ

の活動を問われるのだと思います。その中で、先細りになっていく団体も出てくるかもしれません。NGOも選別される時代に入ったのではないのでしょうか。

PHDの活動はどうでしょう。PHDの「人づくり」は、成果が目に見えにくいものです。しかしアジア・南太平洋地域の草の根の村々でその芽が出、育ちつつあるという多少の自負もあります。皆様はどうお考えでしょうか。そうした活動を伝えることで、新しいご支援を獲得しようと、事務局でも様々な努力をしていますが、まだまだ力不足で、即、結果には結びついていません。年末募金と併せて、一人でも多くの方にPHDをおすすめいただくことでも、皆様のお力添えをぜひいただきたく思います。

皆様には、年末の出費が重なる時期でもあり、また、ご多忙のことは存じますが、年末のこの時、アジア・南太平洋地域の草の根の人材育成のために、分かちあいをお願いいたします。

PHD NEWS

□会費・ご寄附寄託状況

1999年	8月	142件	2,754,325円
	9月	103件	1,575,225円
	10月	69件	11,272,775円
		314件	15,602,325円

以上の通り皆様より多くの会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力の厚くお礼申し上げます。

□組合員の皆さん、ありがとう
10月18日、自動車総連(草野忠義会長)より今年も愛の福祉カンパを頂戴することができました。東京都港区で行われた贈呈式には今井理事長が出席し、会場の組合の委員の方々に礼と報告を申し上げます。

□半期で80人の新会員
71号の会報と一緒に会費のお願いをしました。4月から9月までの半年に約80名の方に新たに会員となっただけ、感謝しています。会員としてのご支援は、とても大切なものです。さらに多くの方のご参加を必要としていますので引き続き、PHDの活動をご紹介下さいますよう、お願いいたします。

終身維持会員 5名
PHD会員 65名
友の会会員 9名

□ホストファミリー募集
18期生4名の滞在家庭を募集します。詳しくはお問合わせ下さい。
期間: 2000年4月から1年間。はじめの6週間は毎日、以降月平均7日程度。
場所: 神戸三宮まで1時間程度で通える範囲。経費: 当会規定の食費、滞在費をお支払いします。

研修生
・リンダ・アニス (バブアニューギニア、女性、21才)
・アフダール (インドネシア、男性、30才)
・ブンシー・ブチャレスカイワン (タイ、女性、19才)
・ノバドン・カヨムドゥ (タイ、男性、23才)

〇月×日のPHD協会

職員 伊藤 事務所内倉庫が手狭になり近くの福祉施設の一角を借りることに。荷物の移動に、若手青年を集め肉休労働奉仕隊を組織。力仕事の期待に応える。

職員 小松 4日間のPCM研修中級コース、1泊2日のJICA-NGO研修会、ポール先生ワークショップと続けて参加。その成果に、周囲の期待は特大。

職員 田中 寄附・会費収入の苦戦を少しでも補うべしと、力を入れて製作した新デザインのTシャツがなかなか好評。とりあえず期待に応え、一息。

職員 谷 エディーさんの研修に付添い鹿兒島へ。早い予約の飛行機は安いとの情報に問い合わせるも、競合しない路線は割引少なめで、結局バスで。期待はかなく。

職員 藤野 外務省の人も交えたパネルディスカッションの進行役。つつがなく上品に終えるも、日常を知る人からはおちゃらけが少なく、期待ハズレとの評価。

職員 山西 大阪のバザー一店時に1等ラスペガス旅行のクジ引き有。当ててさらにギャンブルでもう一山資金稼ぎをと夢見るも、その期待は5千円の食事券に。

(ひとり言の多いもん順)



草の根交差点

私は去年新しくできた関西国際大学（三木市）に通う20歳の学生です。

PHD協会に興味を持ち始めたのは岩村昇先生の授業を受けた時でした。先生は荷物運びのネパール青年の話をしてくださり、自分の持っているものを少し分けてあげる事の大切さを学びました。

PHDと関わるようになったきっかけ

は、大学で「PALNE」^{パルネ}（ネパール語で育つという意味。NEPALをもじってつけました。）というアジアに興味のある人が集まり、勉強したり、交流したりするクラブを作ったことです。

その時、どこかの国際協力団体と関わる事も、クラブのプログラムにいられていこうと話しました。そして、岩村先生がお作りになり、顧問の先生が会員であることをはじめ、大学に一番関わりがあるPHDと、ということになりました。3月の16期研修生の報告会に参加したのがPHDに関わる第一歩になりました。

春には大学でワークショップを企画し、顧問の後輩にあたる小松さんに講師として来ていただきました。その時に来ていただいた地域のPHDのボランティアグループ、サンガティの方には、その後もネパール料理の作り方を教えていただいたり、秋の地域のイベントと一緒に参加させてもらったりしています。

色々な人とつながれるPHDが大好きです。

山本 久美子

編集メンバー：中川有二、長尾亜希子、納堂邦弘、飛田敦子、宮崎龍貴、山本久美子

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。